



●阿部耳鼻咽喉科医院 院長

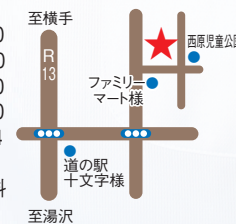
あべ たかし  
**阿部 隆**

横手市【耳鼻咽喉科 / アレルギー科】

阿部耳鼻咽喉科医院

■診療時間  
月・火・木・金 AM8:30~12:00  
PM2:30~ 5:00  
水 AM8:30~12:00  
土 AM8:30~12:30

■住所 横手市十文字町西原2番町1-4  
■電話 0182-42-3341  
■診療科 耳鼻咽喉科・アレルギー科  
■休診 日曜・祝日



# 耳鼻咽喉科医療の広くて深い 世界を地域医療に活かす！

## 歯学部を卒業後、医学部へ編入

横手市十文字町にある阿部耳鼻咽喉科医院の院長・阿部隆先生は、岩手医大歯学部を卒業したのち、同大学の医学部に編入するという異色の経歴の持ち主だ。医学部を卒業後は、耳鼻咽喉科のなかの、聴覚学、耳科学、神経耳科学を専門領域として、15年間にわたる大学医局生活で多くの臨床経験と研究活動を行い、平成3年に医院を開業した。阿部耳鼻咽喉科医院は、難聴・耳鳴・めまいの正確な診断と治療、補聴器外来、子どもの言語発達外来、舌下免疫療法、いびき・無呼吸外来、禁煙治療と幅広い診療を行っている。また、はやくから炭酸ガスレーザー照射装置を導入するなど、日帰り手術を積極的に実施しているところが特徴だ。

阿部院長が生まれ育ったのは冬期には2mを超える積雪に閉ざされる、稲庭町の13軒しかない限界集落。

「当時の旧・稲庭川連町には歯科医が一人もいませんでした。歯の治療を受けるためには山を越えた湯沢市までバスに乗って1日かかり。若い頃から地域のために何かしたいという思いがあり、それが歯科医を目指した第一の理由です。」さらに「林業を営む実家の家と山を守って欲しいと母に言われていたので、歯科医なら両立できるのではと考えました。」岩手医大の歯学部時代には、「合唱音楽と山歩きの旅で青春時代を謳歌した」と話す阿部院長だが、いずれ歯科医になるにしても、もう少し人間を科学的、医

学的に見る勉強をしたという思いがあり、あらたに編入制度ができた医学部に進むことになった。

そして「医学部を卒業するにあたって進路をどうするか。憧れの街であった京都で歯科口腔外科を研修してから歯科医として実家に帰ろうと京都大学を尋ねたら、その教授は医師と歯科医のダブルライセンスを持っていて、是非うちの大学院に來なさいと言ってくれたんです。」ところが京都から大学に戻ると、医学部耳鼻科の立木孝教授から「医学部に編入してきたときから君を見ていた。歯学部での勉強をいちばん活かせるのは耳鼻科だから私のところにこないか」と誘われることに。しかし京都大学に行くことを決めればかりで、話を保留したという。「その後、医師の国家試験まですぐという時期に、私は肺気腫という絶対安静が必要な病気で1か月間入院することになってしまいました。すると立木教授が週に2、3回は病室を訪ねてきて励ましてくれたのです」

「立木教授は名講義を行う、臨床医としても魅力的な紳士で、学生の評判がピカイチでした。その教授がそこまでしてくれるのかと感じ入り、病室から京都大学へお断りの手紙を書きました」

## ストレスが誘因する急性難聴

阿部先生の専門は、聴覚医学（難聴・耳鳴）・耳科学（中耳炎）、神経耳科学（めまい）。なかでも急性難聴を大学医局時代から主な研究テーマとしてきた。「正確には「急性低音障害型感音難聴」といい、急に耳の閉塞感、耳鳴り、聴覚過敏などの症状が起きる病気です。原因は不明ですが職場や家庭での精神的・肉体的ストレスが誘因となり発症します」突然耳が聞こえにくくなる突発性難聴とめまいをくり返すメニエール病のちょうど中間に位置づけられる病気で、「立木教授の命を受けて私が発表した診断基準が、今もこの病気の診断基準の柱となっています」。

だが「ストレス性難聴ともいえるこの病気の性質を知るためには一人の患者を5年、10年という長い期間みていかなければいけません。開業した実地臨床医でなければ、そうした臨床データを集めることはできません」と阿部院長は話す。「開業以来15年間の臨床データを集めて検討し、平成17年開催の第50回日本聴覚医学会・記念大会の教育セミナーで『急性低音障害型感音難聴の診断』というテーマで特別講演しました。その後のデータをまとめて近いうちに発表する予定だという。そして最近のコロナ禍で、このストレス性難聴が増えている。

「ストレス性疾患の治療で最も大切なことは、寝て休むこと、体を動かすこと、小汗をかくような有酸素運動（エアロビック）をすることです。ストレス解消のために自宅での毎日のストレッチと筋トレ、週に1〜2回のエアロビックを勧めています」

医局時代の研究で大切なものがもう一つあったという。「当時の最新研究テーマの一つが耳音響放射。耳に音刺激を加えると、その刺激音とは異なる音と同じ耳から記録でき、これを測定することによって内耳の聴覚機能が分かるということもです。立木教授の計らいで、これを発見したロンドン大学の D.Kendall 博士の元へ留学できたことは、それまでの人生を一変させる出来事でした」博士から、耳音響放射を直接教えていただき、その測定装置を日本で初めて岩手医大に導入、臨床応用について研究を行いました。平成3年、アジアでは初めて盛岡で開催された国際聴覚医学会の耳音響放射シンポジウムで講演したことも忘れられませんが、「この検査装置は現在、新生児・乳幼児の聴覚スクリーニング、内耳性難聴



豊かな自然の中に人々が集う「令和共生の里プロジェクト」

## 地域医療から地域起こしへ

や心因性難聴などの診断に広く使われており、開業時から阿部耳鼻咽喉科医院にも導入されている。

「成人の主に治る難聴を専門に研究してきましたが、開業すると、むしろ治らない難聴の方がはるかに多いこと。同じ難聴でもその意味あい、大切さが乳幼児と成人では全く異なることを再認識しました。耳鼻科医療の広くて深い世界をどのような形で地域医療に活かせるかが、開業した私の大きなテーマになりました」

阿部院長が今とくに力を入れているのが聴覚障害児、言語発達障害児の療育支援を行う言語発達外来だ。「言語発達障害の原因に聴覚障害が占める割合は20〜25%です。耳鼻科医は聴覚障害の診断・治療ができるし、口腔・舌・咽頭・喉頭など構音発声器官を診療域としていきますから言語発達障害児にもっと関わるべきですが、慣れた言語聴覚士が必要なため容易ではありませんでした」

「15年ぐらい前から秋田市の難聴児通園療育施設『オリブ園』の前園長（言語聴覚士）に週1〜2回きてもらって言語発達外来を行っていましたが、昨年からは言語聴覚士が常勤になりました」また成人・高齢者の難聴に対応した補聴器外来も行っている。「難聴にはいろいろあります。治療で改善する難聴、補聴器があまり有効でない難聴など人それぞれなので、補聴器を考えたらず、まず耳鼻科を受診、相談することが大切です」

阿部耳鼻咽喉科は秋田県の開業医では

3軒しかない「補聴器適合検査施設」で、2人の「認定補聴器技能士」（国家資格）が定期的にきてくれている。阿部院長が目指すのは「医者から見た最高レベルの診療ではなく、患者の希望に沿った費用対効果の大きい診療」。だから手術も最小の負担で最大の効果が得ることを心がけ、開業以来の手術総数は5300例を超える。すべて局所麻酔で、外来の日帰り手術のみとしている。こうした地域医療への取り組みのほか、今、進めているのが「稲庭町下川原・令和共生の里プロジェクト」。

稲庭町の生家の広大な裏山を拠点にして、「私生まれ育った集落が、大きなストレスを抱える人や身体的・知的精神的な障害を有する人たちにとって、憩いの場、癒しの里になるようにしたい」と阿部院長は話す。院長が理事をつとめる2つの社会福祉法人「長いスプーン」（湯沢市皆瀬、「グリーンローズ」（秋田市）の施設利用者や医院の患者、集落の人などが参加した植樹祭、幼稚園児が自然と親しむイベントなどが開催され、地域起こしにもつながる活動となっている。

# 医療法人 阿部耳鼻咽喉科医院

院長 阿部 隆

横手市十文字町西原2番町1-4

TEL 0182-42-3341

<https://www.abejibika.com/>



## 診療案内

- 消化器系（口から食道の入口）・呼吸器系（鼻から気管の入口）・頭頸部の異常
- 視覚以外の感覚（聴覚・平衡感覚・嗅覚・味覚）の異常
- コミュニケーション障害（ことば発達から補聴器などによる聴覚リハビリまで）
- 聞こえとことばの発達を主とする「発達障害児」の診療と療育支援
- その他、鼻アレルギーに舌下免疫療法・レーザー手術、いびき・無呼吸外来、たばこ病(?)への呼吸機能検査・禁煙治療など